

モラロジー研究会 開催報告

令和5年11月1日(水)、生涯学習センター(研修館302教室)にて、「廣池千九郎が後世に託した34項目の研究課題の検討 その2 -自然科学を中心に-」をテーマに、ハイブリッド配信の方式で研究会を開催しました。モラロジーの維持員、研究員、職員合わせて、35名の参加となりました。

冒頭で、当研究推進プロジェクトのリーダー・宮下和大(道科研副所長、主任研究員)が趣旨説明を行い、続けて立木教夫(道科研客員教授)、小山高正(同)の2名が報告しました。それぞれの報告テーマと要旨は、以下のとおりです。

①立木 教夫「遺伝関連項目の検討」

「本発表では、廣池千九郎が後世に託した34項目の研究課題に含まれる「遺伝関連項目」12項目中の「(5) 一代獲得形質の研究」を取り上げた。まず、『道徳科学の論文』(『論文』と略す)で体系化された廣池の遺伝の議論をレビューし、廣池による立論の構造、道徳的意味づけ、結論を明らかにした。次に、廣池の議論を、『論文』出版以前の遺伝学の状況の中で捉えなおすため、遺伝学史を概観し、廣池が利用可能であった遺伝学的知識を確認した。最後に、廣池の「一代獲得形質の遺伝」に関する結論、つまり、獲得形質の遺伝には生殖質遺伝と社会遺伝の二つの経路があり、前者は、伝達され得ても極めて稀まれだが、「一代の獲得形質でももし両親の神経系統をアンダーマイン(undermine 侵害)するに至れる場合にはそれが遺伝する」、また、後者は、「社会的に伝染して文明の制度及び施設が伝達されていく一種の遺伝がある」とした結論に関し、その前半は、エピソードの知見により、また、後半は、遺伝子-文化共進化の知見により、廣池の結論を支持する方向で研究を展開していくことは可能であろうと述べた。」

②小山 高正「心身相互作用関連項目の検討」

「廣池千九郎が後世に託した34項目の研究課題の内、心身相互作用関連項目を検討した。『論文』第4章182頁の内98頁が心身相互作用にかかわる議論に当てられていることからその重要性が伺える。『論文』執筆当時、キャノンの神経生理学的研究とも出会い、具体的事実として心身の問題を扱うことができた。その事実の背景に心理学史、心身問題、心身相互作用を経て精神作用が物質(身体)より優位であることを示す議論を丁寧に進めた態度は今日的にも大いに評価できる。心理相互作用にかかわる5つの項目は、大脳生理学、精神身体医学、精神神経免疫学、ポジティブ心理学などの発達により概ね実現できたが、各学問の発展に合わせて継続する必要がある。心身相互作用に関する研究は道

徳的因果律の至近要因（メカニズム）を示すのに有用であったが、今後は幸福学（ポジティブ心理学やウェルビーイング研究）などと結びつきながら更なる研究の発展が期待される。また因果律の究極要因（生存価を上げる機能）となる万世一系が現代にどう展開され得るのかの議論も今後必要となろう。」

全体討論・質疑応答のパートでは、各報告内容をさらに掘り下げる質問や議論が展開され、廣池博士の洋書収集の基準は何だったのか、エピジェネティクス研究の結果が植物と人間とでどのように異なるのか、また動物と人間との相違点は何かなど、多岐にわたりました。

議論の後半では、今回取り上げられた『道徳科学の論文』の「基礎論」（第3章と第4章）と、「最高道徳論」の接続の問題に話題が及び、遺伝学と「徳の累積」や「累代教育」との関係、「運命」改善の議論との接点、心身相互作用論と道徳実行の関係、「伝統の原理」や「人心開発救済の原理」との関連など、『論文』や最高道徳を学ぼうえで重要なポイントについて議論を深めました。

（文責：モラロジー研究推進プロジェクト コーディネーター 竹中 信介）